



ARTIST
SUPPORT

【アーティストサポート】へ、多くの皆様からお気持ちをお寄せいただきましたことに、心より感謝申し上げます。
寄せられたご支援は、アーティストの様々な活動に幅広く使わせていただいております。

「人のいるところには夢がある」2026年には創業50周年を迎えるジャパン・アーツの理念です。

どんな時代においても、音楽・芸術から生まれる感動は、
人々に夢・希望・生きる力を与えてくれます。

これまでの活動レポートは、ジャパン・アーツのホームページに
掲載しておりますので、どうぞご覧ください。

今年も引き続き変わらぬご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。



アーティストサポートの詳細は
こちらをご覧ください。

2024年度ご支援いただいた皆様

<2024年度 年間サポート>

朝妻 幸雄 F.A. 井上 豊 岩村 和央 上原 啓子 上村 憲裕 M.U. K.O. S.O. 小田島 容子
片山 由美子 H.K. K.K. 栗田 美知子 新貝 康司 M.S. M.T. R.T. A.D. 田中 治郎 F.T.
トゥルーラブ 真智子 トゥルーラブ 真凜 K.N. E.N. 兒子 弥生 S.N. 長谷川 智子 T.H. 樋口 美枝子
M.H. 平山 美由紀 藤野 盾臣 松尾 芳樹 真野 美千代 三木谷 晴子 J.M. M.M.

株式会社青林堂 株式会社セキド 三井住友カード株式会社

株式会社ソーシャルキャピタルマネジメント 株式会社ロジックアンドエモーション

ライフブラン株式会社 Heart of the Earth株式会社 きづきアセット株式会社 (匿名希望 27名)

<2024年度 福間洸太郎に「花を贈ろう!」>

あかほり みお 厚見 有紀 F.A. J.A. 池田 惇子 石黒 裕康 石崎 典子 井住 智子 R.I. A.I.
岩塚 究 K.U. M.E. 猿渡 かおり M.E. 大畑 篤子 大原 志津子 大原 みずほ 小山田 美代子
カッキー 柿 信子 柏 香織 T.K. 川島 理絵 駒場 雅世 A.K. 桜猫 桜井 桂子 佐々木 珠乃 佐野 孝枝
A.S. N.S. 塩崎 勢子 W.S. A.S. 新里 真美子 進導 幸太郎 鈴木 志保里 N.S. 早田 利江 高島 秀子
鷹巢 綾子 高田 恵子 N.T. 武田 眞子 武田 佳美 辻田 奈津 土屋 麻起 長江 雅子 中嶋 妙子 Y.N.
中島 葉子 S.N. 中村 祥子 A.N. K.N. 野口 由美 H.N. 林 順子 平井 聖香 平山 美由紀 深堀 悦代
S.F. 伏見 由加 A.H. R.M. K.M. 三浦 祐子 三浦 洋子 村田 恵美 村山 幸恵 山口 恵美
依田 晴美 (匿名希望 24名)

<2024年 ウィーン少年合唱団 オフタイム・サポート>

井口 和美 K.K. Rimiko M.H. M.M. 真野 美千代 水足 久美子 水足 秀一郎 ロロコミ・リリコミ
(匿名希望 12名)

<2024年 ウィーン少年合唱団 ツアー・サポート>

井口 和美 T.O. K.K. Rimiko M.T. 平山 美由紀 細沼 康子 M.M. 真野 美千代 村瀬 治男
ロロコミ・リリコミ (匿名希望 11名)

2025年1月6日現在 敬称略

ご支援についての詳しい内容は、株式会社ジャパン・アーツ
お気軽にお問い合わせください。アーティストサポート係 TEL.03-3499-7720(平日11:00~17:00 年末年始を除く)

阪田知樹

リスト~ピアノ協奏曲の夕べ

Tomoki SAKATA plays LISZT

指揮: 角田鋼亮

Conductor: Kosuke Tsunoda

管弦楽: 東京フィルハーモニー交響楽団

Tokyo Philharmonic Orchestra

2025年1月23日(木) 19:00開演

主催: ジャパン・アーツ



文化庁 劇場・音楽堂等における
子供舞台芸術鑑賞体験支援事業



© Ayustet

本日はご来場いただき、誠にありがとうございます。

リストと私の出会いは、20年以上前にまでさかのぼります。以来、作曲家・音楽家：リストに魅了され、その作品と音楽観を研究すること、その魅力を伝えることをライフワークの一つとしてまいりました。

本公演ではリストが遺したピアノと管弦楽のための作品より、最も重要な4作品を取り上げます。

リストのピアノ協奏曲では華麗な第1番があまりにも有名ですが、ワーグナーやリヒャルト・シュトラウスの歌劇を思わせる第2番こそ、リストの音楽の真骨頂だと私は思っております。

異なる個性を持つ4作品をお楽しみいただけましたら嬉しいです。

阪田 知樹

気鋭が弾く！待望のオール・ショパン・プログラム

阪田知樹 ピアノ・リサイタル

2025年3月14日(金)19:00開演
東京オペラシティ コンサートホール

プログラム

Program

リスト～ピアノと管弦楽のための作品選

ピアノ協奏曲第2番 イ長調 S.125/R.456

Konzert für Klavier und Orchester Nr.2 A-Dur S.125/R.456

死の舞踏(「怒りの日」によるピアノと管弦楽のためのパラフレーズ)S.126/R.457

Totentanz - Paraphrase über "Dies irae" S.126/R.457

ピアノ協奏曲第1番 変ホ長調 S.124/R.455

Konzert für Klavier und Orchester Nr.1 Es-Dur S.124/R.455

ハンガリー幻想曲 S.123/R.458

Fantasie über ungarische Volksmelodien S.123/R.458

◆ 出演 ◆

ピアノ：阪田知樹
Piano: Tomoki Sakata

指揮：角田鋼亮
Conductor: Kosuke Tsunoda

管弦楽：東京フィルハーモニー交響楽団
Tokyo Philharmonic Orchestra

Tomoki SAKATA plays LISZT



© Ayustet

阪田知樹(ピアノ)

Tomoki Sakata, *Piano*

2016年フランチ・リスト国際ピアノコンクール(ハンガリー・ブダペスト)第1位、6つの特別賞。2021年エリザベート王妃国際音楽コンクールピアノ部門第4位入賞。第14回ヴァン・クライバーン国際ピアノコンクールにて弱冠19歳で最年少入賞。

ピティナ・ピアノコンペティション特級グランプリ、聴衆賞等5つの特別賞、クリーヴランド国際ピアノコンクールにてモーツァルト演奏における特別賞、キッシンゲン国際ピアノオリンピックではベートーヴェンの演奏を評価され、日本人初となる第1位及び聴衆賞。

国内はもとより、世界各地20カ国以上で演奏を重ね、国際音楽祭への出演多数。クレムリン音楽祭では、オール・リスト・プログラムによ

るリサイタルをニコライ・ペトロフ氏が「世界一のリスト」と絶賛。2015年CDデビュー、2020年3月、世界初録音を含む意欲的な編曲作品アルバムをリリース。阪田知樹ピアノ編曲集「ヴォカリーズ」を2022年5月に、「夢のあとに」を2023年7月に、阪田の作曲した「アルト・サクソフォーンとピアノのためのソナチネ」が23年11月に音楽之友社より出版。内外でのテレビ・ラジオ等メディア出演も多い。

東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校、及び同大学を経て、ハノーファー音楽演劇大学にて学士、修士首席修了、現在同大学院ソリスト課程に在籍。世界的ピアニストを輩出し続ける「コモ湖国際ピアノアカデミー」の最年少生徒として認められて以来、イタリアでも研鑽を積む。パウル・バドゥラ＝スコダ氏に10年に亘り師事。

2017年横浜文化賞文化・芸術奨励賞、2023年第32回出光音楽賞、第72回神奈川文化賞未来賞、第20回ベストデビュタント賞を受賞。



© Makoto Kamiya

角田鋼亮(指揮) Kosuke Tsunoda, *Conductor*

東京芸術大学大学院指揮科修士課程並びにベルリン音楽大学国家演奏家資格課程修了。2008年、カラヤン生誕100周年記念の第4回ドイツ全音楽大学指揮コンクール第2位入賞。ベルリン・コンツェルトハウス管、ブランデンブルグ響、上海歌劇院管、N響、読響、都響、東響、東京フィル、名古屋フィル、京響、大阪フィル、九響等と共演している。2015年よりセントラル愛知交響楽団の指揮者を務め、2019年より常任指揮者に就任。2016-2020年大阪フィルハーモニー交響楽団指揮者、2018-2022年仙台フィルハーモニー管弦楽団指揮者を歴任するなど、いま日本で最も期待される若手指揮者の一人として各地にて活躍の場を拡げている。2024年4月より、セントラル愛知交響楽団音楽監督を務めている。

東京フィルハーモニー交響楽団 Tokyo Philharmonic Orchestra

1911年創立、日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督チョン・ミョンフン、首席指揮者アンドレア・バッティストーニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフ。自主公演の他、新国立劇場他でのオペラ・バレエ演奏、NHK他における放送演奏で高水準の演奏活動を展開。海外公演も積極的に行い、高い注目を集める。1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を締結。文京区、千葉市、軽井沢町、長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。オフィシャルウェブサイト <https://www.tpo.or.jp/>



© 上野隆文

ニ、特別客演指揮者ミハイル・プレトニョフ。自主公演の他、新国立劇場他でのオペラ・バレエ演奏、NHK他における放送演奏で高水準の演奏活動を展開。海外公演も積極的に行い、高い注目を集める。1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を締結。文京区、千葉市、軽井沢町、長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。オフィシャルウェブサイト <https://www.tpo.or.jp/>

阪田知樹

リスト〜ピアノと管弦楽のための作品選

フランツ・リスト(1811-1886)は、いうまでもなく19世紀のピアノ音楽史を彩るショパン(1810-1849)やシューマン(1810-1856)より1歳年下の、「史上最高のピアニスト」と呼ばれた「コンポーザー・ピアニスト」である。阪田知樹氏は、2016年にブダペストのリスト国際コンクールで優勝された、「リストのスペシャリスト」であると同時に、ご自身も作曲を手掛ける「コンポーザー・ピアニスト」である。だからだろう、阪田氏はリストのピアノ技巧の面よりも「作曲家」としての側面を高く評価している。

事実、今回リストの15曲あるピアノ協奏曲的な作品から選ばれた4曲は、いずれもリストが1830年代の「若きヴィルトゥオーゾ(超絶技巧のピアニスト)」時代に着想しながらも、1847年のピアニスト引退以後の、熟達した「作曲家」時代に大幅な改訂を加えた作品ばかりなのである。曲目解説中にも、阪田氏のインタビュー内容を織り交ぜたが、リストの作品がけっして「きらびやかだが内面性に欠ける」わけでも、「超絶的なピアノ・テクニクを誇示しているだけ」でもない。リスト作品には、みごとな構築性と抒情性(阪田氏は「リストにおけるショパン性」と表現)にあふれていることを、阪田氏自身が演奏で実証することだろう。

阪田氏も言っている。今回の演奏会は「私の演奏家人生の中でも、大切な公演になると思います」。「リストの神髄に触れる」、たいへん楽しみな演奏会である。

ピアノ協奏曲第2番 イ長調 S.125/R.456

作曲の着手は1839年ながら、何回も改訂が重ねられ、1857年の初演以後も手が増えられ、最終的に1861年に現在の形となった。ちなみに、このようにひとつの作品に対して延々と改訂や再作曲を繰り返し

て、ときには楽器までも変えてしまうほど作品の姿が変わり続けることを「ワーク・イン・プログレス」という。リストは、その典型的な作曲家であった。

阪田氏はピアノ協奏曲第2番のことを「ピアノ入りの交響詩」で「革新的」と述べているが、きわめて本質を突いている。なぜなら、交響詩(これ自体が、リストの創案したジャンルである)は、次の特徴を持つからだ。ひとつは、「主題変容の作曲技法」すなわち、最初に提示されたメロディが、楽曲中で次々と性格を変えた形で現れる作曲法によることだ。もうひとつは「多楽章ソナタ」(アレグロ楽章―緩徐楽章―スケルツォ―フィナーレ)を単一楽章の「ソナタ形式」(呈示部―展開部―再現部―コーダ)へと融合していることだ。

曲は6つの部分からなる。第1部アダージョの序奏的な部分で、ソナタ形式の呈示部にあたる(第1主題)。第2部は切迫したアレグロの第2主題部。第3部は緩徐楽章的で、第2主題が甘美なフレーズとなって現れる。第4部は躍動的なアレグロ。スケルツォ楽章に相当し、展開部でもある。ピアノとオーケストラのエキサイティングな掛け合いが繰り広げられる。第5部は再現部でもあり、第1主題が行進曲風に変形されている。第6部は、これまで出てきた主題がオールスターキャストで登場し、華麗かつ劇的に終わる。

死の舞踏(「怒りの日」によるピアノと管弦楽のためのパラフレーズ) S.126/R.457

作品解説のためには、2つのキーワードを説明しておく必要がある。一つは、「死の舞踏」である。あらゆる身分の人間が「死」の前には無力であり、一種の集団ヒステリーを起こし、死んでも踊り続けた伝説のことである。もともと14世紀半ばに大流行したパンデミック、ヨーロッパにおける黒死病(ペスト)により、人口の3割から5割が命を落としたことが背景にある。骸骨が

踊りまくる絵画として、目にされた方も多いだろう。

もうひとつのキーワード「怒りの日」は、カトリックのグレゴリオ聖歌の、葬式のセクエンツァ「ディエス・イレ」のこと。いわゆる「最後の審判」のことを歌っている。ちなみにリストはカトリック信者で、1865年、54歳にしてカトリックの下級聖職者に叙階されることになる。それ以後、彼は黒い僧衣を生涯まとい続けた。

リストがこの曲に着手したのは1847年ごろだが、最終的には1862年に完成した。「ディエス・イレ」のメロディによる、主題変容の協奏的作品である。阪田氏は、リスト国際ピアノコンクールの優勝時にも、この曲を演奏している。

なおリストはのちに、サン＝サーンス作曲の「死の舞踏」もピアノ独奏用にアレンジしている(1876)。この題材にいかに関心があったか、うかがい知れよう。

ピアノ協奏曲第1番 変ホ長調 S.124/R.455

リストのもっとも名高い、ピアノとオーケストラのための作品。変ホ長調が選ばれているのは、チェルニーの下で学んだリストがベートーヴェンの孫弟子にあたることから、ベートーヴェンのピアノ協奏曲第5番「皇帝」変ホ長調を強く意識したからかもしれない。

作曲は1830年代に開始されているが、当初は3つの楽章しかなかった。ヴァイマルの宮廷楽長になった1849年にはほぼ今日の4楽章形式に改訂したが、初演後の1856年にも再改訂が行われた。ちなみに1855年2月17日のヴァイマル宮廷での初演は、指揮者はあのベルリオーズであり、ソリストは当然リスト自身であった。

作品の形式は、のちにバルトークが「循環形式によるソナタ形式を初めて完全に実現させた作品」と看破したように、やはり交響詩と同じ「主題変容」の技法で作曲されている。

第1楽章は自由なソナタ形式で、いきなりピアノのカデンツァで印象的に始まる。第2楽章はノクターン風の緩徐楽章。第3楽章はスケルツォ楽章で、トライアングルの用いられる。そのため、敵対する音楽批評家ハンズリックが「トライアングル協奏曲」と揶揄したが、彼が推していたブラームスが交響曲第4番の第3楽章でトライアングルを用いたときにはスルーしている。つまり、リストの作品に対する単なるいちゃもんであった。第4楽章はここまでの総集編であり、第1楽章の主題も再登場して、劇的なクライマックスが築かれる。

阪田氏はかつて、師匠パウル・バドゥラ＝スコダ氏からこの曲のレッスンを長時間受けたという。リストの正統派を自任するバドゥラ＝スコダ氏直伝の演奏が楽しみである。

ハンガリー幻想曲 S.123/R.458

正式名称は、「ハンガリー民謡旋律にもとづく幻想曲」。もともとはリストが1840年代にピアノ独奏曲として作曲した、ハンガリー狂詩曲第14番へ短調が原曲である。1852年ごろにピアノとオーケストラのための幻想曲として再作曲された。

タイトルに「ハンガリー民謡」とあるにもかかわらず、実際にはハンガリー固有の民謡ではなく、「ロマ(いわゆるジプシー)」の「ヴェルブンコシュ」というスタイルの音楽である。リストは民族的にはハンガリー人(フン族)ではなくドイツ系であり、一生涯ハンガリー語も喋れなかったため、ロマ音楽をハンガリーの民謡だと勘違いしていた。

とはいえ、リストがハンガリーの人々に親近感を抱き、自身を国民的英雄として尊敬してくれるハンガリーを心から愛していたことは間違いない。「ハンガリー幻想曲」にも、そうしたリストのハンガリー愛を聴きとることができるだろう。